校長室から

甘利　尚之

令和５年３月１５日（木）No.28（最終号）

「塩尻小学校（児童、保護者、地域の皆様…）の全て」に感謝

３年間お世話になりましたが、本年度をもちまして、定年退職となります。今までありがとうございました。

本日の離任式でも、子どもたちにお話ししましたが、教員生活の最後が母校であることはとても不思議なことであり、何よりも幸せなことでした。この塩尻に育つかわいい「後輩たち」の、正に育ちつつある現場に居合わせることができた幸せです。

また、本日の３学期の終業式では、「校長の願い」について、話しました。

校長は、「だれにでもよいところはある、よいところをつくれる。」としんじている。

校長は、「じぶんに、じしんをもってせいかつをしていってもらいたい。」とおもっている。

校長は、「すべてのこどもに、しあわせになってもらいたい。」とねがっている。

「最後に、少し、校長の考えを聞いてください。私は、今まで、一人一人のよさ、がんばったことを取り上げて、全校のお話をしてきました。今日も６人、紹介しました。それは、なぜだと思いますか？それは、子どもたちには、誰にでもよいところがある、また、その気になれば、これからよいところをつくることができる、と信じているからです。これは、わたしが、初めて先生になった時から変わりません。だから、『よいところのある人』『よいところをつくろうとしている人、作りかけている人』を是非紹介したいと思ったのです。そして、自分に良いところがあると思えば、これから大きくなっていく時、自分に自信をもって生活し、いろいろなことに挑戦していくことができる、そんな人になれると思っています。そうすると、幸せになることができる、私は、ここにいる人全てに幸せになってもらいたい。ですから、なるべく一人一人のよいところのお話をして、『自分もがんばろう』という気持ちをもってもらいたい、自分に自信を持ってもらいたい、と思ってきました。

今まで、塩尻小学校の子どもたち全員のよさを紹介することはできませんでしたが、皆さんには、一人一人よいところが必ずある。目に見えるところでも、ちょっと目には見えにくいところでも、目には見えないところでも、きっとある。また、これから作ることもできる。それを信じて、毎日を生活していってください。応援しています…」

私はずっと、未来の「予測不能な時代」を生きていく子どももたちに、生き抜いていく力をつけなければならない、と考えてきました。

新しい学習指導要領では、育成を目指す「資質・能力」、「知識及び技能」「思考力・判断

力・表現力等」「学びに向かう力、人間力等」等々、育てていかなければならないいろいろな大切な力をあげています。どれも、未来を生き抜いていくために大切なのですが、せっかく素晴らしいたくさんのことを学んでも、その価値を自分で分かっていなければ、「学んだことを生かし、人とつながりながら仕事をし、自分の力で飯を食っていかれる人間」とはなれないのではないかと考えています。一言でいってみれば
「自分が学んできたもの、経験してきたものは確かだ。（たとえ、一時うまくいかないことがあっても）自分の生き方はこれでいいんだ…」
といった、「自己肯定感」ではないかと考えます。自分の生き方を肯定する気持ちが自分を支え、自分を肯定できるからこそ、人とつながっていけるのではないかと考えます。

「自己肯定感」は、「幼児的万能感」（幼児に見られる「自分は万能、何でもできる」という感覚）に見られる「自分は何でもできる」「自分は何をしても許される」「自分は特別だ」といった、根拠のない自信、根拠のない優越感ではありません。自ら努力して手に入れたもの、地道にコツコツ努力してできるようになったこと、壁にぶち当たりながらも友達と協力して乗り越えた経験、様々な考え方を戦わせる中で得た「納得解」等々、しっかりとした学びを通して得た経験や体験に基づく、根拠ある自信です。

そのために、学校では、よい学びに基づく経験や体験ができる「場」をしっかりしつらえてやらなければいけませんし、その中に見られる、子どもたちのよい姿、取り組みを意識づけてあげることが大切になってくると考えていました。コロナもあり、十分にできたとは言えませんでしたが。

また、子どもが「今自分が経験、体験できたことは素晴らしい」と自覚できればよいのですが、子どもたちがもつ価値観の中では、今自分がしていることが本当に素晴らしいことなのかどうか、判断できないことが多くあると思います。本人は気がつかないでいる「よさ」を教えてあげること、「あなたがしていることには～～～なよさがあるんだよ」と意味づけてあげること、友達の「よさ」に学べるように、紹介してあげること、先生方にも是非にとお願いをしてきました。子どもたちに、しっかりとした学びを通して、根拠のある自信、自己肯定感をもたせてあげることを大事にしようと考えてきました。願ってきました。

「学校への恩返し」を胸に、３年間を過ごしてきましたが、勿論十分にできたとは言えません。「自己肯定感」もそうですが、特に、地域の方との関わりを通し、「この塩尻の地やそこに住む人々に愛着を育む子どもたち」を育てることができたのか、内心忸怩たるものがあります。ここで、校長は終わりますが、地域の住人であることは変わりません。一住人として、塩尻小の子ども達のこれからを見守っていきたいと考えています。

ともあれ、今日まで、学校教育を支えてきていただいた保護者の皆様、地域の皆様、そして「学校の主人公」の児童の皆さん、もろもろ全ての方に感謝を申し上げて終わりにしたいと思います。今まで本当にありがとうございました。

（「校長室から」はHPに書いてきた便りです。～№27はHP上にあります）